

研究ノート（I）

近代化日本—欧米との関わりで見ると日本の近代化—(1)

— 世界史的視点から —

松原正道*

はじめに

現在の日本の世相，社会現象，政治状況を見た時，我々は何を感じるだろうか。

投票率が30パーセント台で推移している国政選挙もある中で行われている政治。これをもたらしている有権者，国民。何が故の低投票率なのだろう。

こうした政治の在り方によって形づくられている社会，そこで自らの「生きる」を送っている投票した人，しなかった人。これらの人々は何を感じ，何を考え，何をしているのだろうか。

日本国憲法は，三本の柱である「国民主権（主権在民）」，「基本的人権の尊重」，「平和主義」を以てその特徴とする。

そして，特に，前二者によって，我々日本国民は，「自ら」が「主体」となって政治に携わり，これを動かすと言う理念に基づいて，「個々人」は「自らの意思に従って」選挙に参加して，投票を行う事が保障されているのである。

この事から，30パーセント台の投票率をどう考えたら良いのだろうか。

投票率30パーセント台と言う事は，積極的，消極的とを問わず，「自ら」の「意志」で以て「自ら」の「存在」を「否定」して「投票に行かない人」が60パーセント以上はいると言う事にもなるのであって，保障されている「権利」である投票を「自ら」の「意志」で以て放棄しているのである。これを憲法違反とは言わないのかと言う者もいる。

この事は今の政治，政治家を過半数の人が認めていない事になるのである。だが，それに関わらず，そうした中で選ばれた政治家の過半数で以て物事が決められ，実行されて行くのである。これをどう考えたら良いのだろうか。

この事から，現在の政治家，政権を担っている政府は憲法に抵触しているのではないかと言う議論もある。そして，過半数に満たない選挙を無効にすべきだとも言う。

投票率に現れている如く，国民は政治家に期待しておらず，政治に倦んでいるのである。

*淑徳大学名誉教授

地域の格差の是正もさる事ながら、今の日本にとっては投票率を上げる事が国民あげての喫緊の課題であると言える。

その点で、政治家、特に、政府にとってその責任は重いのである。

そして、その政治家、政府によって国民は莫大な借金を負わされているのであるが、そこには、それを国民が望んだからであると言う理屈もある。

事に当たって「自ら」が「自分の意志」で「考え」、「行動する」事の重要さ、こうしたものを我々日本人はその「生きる」の中でどのようにして育てて来たのか。また、来なかったのか。特に、太平洋（第二次）戦争と、その後の日本において。

こうした事を『近代化日本—欧米との関わりで見ると日本の近代化—<世界史的視点から>』として、我が国の歴史の推移の中から探ろうとするのが本研究の目的である。

この「自ら」を「意識」した「ものの考え方」、それに基づいた「行動」、通常、これを以て「近代化」と言い、これについては、世界史の上で、西欧で見られた「人間（中心）主義」、そして、「合理精神（主義）」を挙げる事が出来、それは、「大航海時代」、「ルネサンス」、「宗教改革」と言う形で以て歴史の上に顕現されるのである。

そして、それは「大航海時代」の波に乗って我が日本にももたらされるのだった。

そうした中で、キリストの教の布教のために「自らの意志を以て」最初に日本に来訪し、西欧の文化、文明を伝えたと言う点で、フランシスコ・ザビエルの存在が特筆されるのである。そして、それによって日本に、「自分の頭」で「考え」、「自分の意志」を以て「行動する」事が根づいたのか、つかなかったのか。

本稿では、そうしたザビエルの人となりアジアでの布教活動に焦点を当てて、考察を進めて行こうと考えている。

そして、固より、「人間（中心）主義」、「合理精神（主義）」を以てそれで良しとするものではない、と言う事も付言しておく。

尚、本研究に当たり、我が国を主とした先人達による研究を出来るだけ手元に集め、これを引用等を以て活用しながら考察を進めて行こうと考えている。

西欧文明の伝道者フランシスコ・ザビエル（I）

序

神話、建国伝説に繋がる我が国の歴史は2600年を超え2700年に迫ろうとしている。

6世紀後半には蘇我氏、物部氏、大伴氏が継体天皇を祖とするとされる大和朝廷において重きをなしていたと言うのである。そうした中で、中国、朝鮮との交渉が盛んに行われ、帰化人と言われる人々の活動も顕著に見られるようになるのだった。

それに伴って、儒教、仏教が導入され、古来、伝わる神話（道）と緇い交ぜになって、日本人の精神構造を形づくって来ているのである。

こうした我が国の歴史にあってヨーロッパの人々との接触は何時の頃だったのだろうか。

室町時代の御伽草子に登場し、渡辺綱（天暦7<953>—万寿1<1024>）等によって討たれた酒吞童子は、シュタインドッジと言う名前から転じたもので、ヨーロッパ系の赤ら顔の人間で、漂着のような事で以て来訪し、事情の分からない日本で、その「生きる」のために山賊のような事をしていたと言う話もあるのである。

こうした話とは別に我が国の歴史の中で、ヨーロッパの人々との接触は「鉄砲伝来」に見られるようなポルトガル（商）人の漂着に始まったとされるのである。

それに伴って、日本航路の開拓、「日本発見」により、交易と一体化したキリスト教の布教を国是とするポルトガルの国策に則りザビエルの伝道活動が行われる事になり、日本にもキリスト教がもたらされ、布教が本格化するのである。

そして、それに伴ってキリスト教の「神」と共に、「人間中心主義」、「合理精神（主義）」が介在する西欧の文化、文明が日本にもたらされるのだった。

I

<信仰者ザビエルの誕生>

「大航海時代」、「ルネサンス」、「宗教改革」を顕現し、「人間（中心）主義」、「合理主義（精神）」を旨とする「近代」、これを我が国に当てはめ、その近代あるいは近代化を考えた時（場合）、16世紀半ばの「鉄砲の伝来」（天文12/11<1543/42>）、「キリスト教の伝播」（天文18<1549>）による西欧との関わりを以てその嚆矢とする事が出来ると言える。

これにより我が国にも西欧流の「人間（中心）主義」、「合理精神（主義）」が伝えられたのである。

「神」を伝えたと言う事と共にこうした西欧文明（化）の伝達者と言う点で、ザビエル（シャ<ハ>ヴィエル）Francisco de yasu Xavier（1506—52）の果たした役割は大きい。

スペイン北部のバスクBsque地方にあったナヴァラNavarra王国の貴族で同王国の宰相だったエチェベリーア家のホアンJuan de Hass（?—1515）とマリアとの間の3男で、6人の子供の末子だったと言う彼はザビエル（シャ<ハ>ヴィエル）城で生まれ、そのためにその名で呼ばれているのである。

このザビエル城はもう一つの城と共に母の婚資だったが、1492年に「レコンキスタ」Reconquista（国土回復運動）をなしとげて誕生したスペイン（エスパーニャ）とフランスとの争いの中で、国王に従いフランス側についた父や兄が戦いに敗れ、王国の衰亡と共に同家も没落、城も破壊され彼は母の家で育てられるのだった。

窮乏の中、法律を学び家の再興を願う家族の輿望を担って、1525年秋、19歳の時、学問の府パリ大学へ入学。その期待とは異なり聖バルバラ学院で哲学を学ぶのだったが、そこで同室になったファーベルPietro Faber (生没年不詳) の真摯な生活ぶりに感化されるのである。

そして、また、同学院にはザビエル城攻撃の指揮をとり、王国の首都パンプローナPamplonaでフランス軍と戦い重傷を負い、その療養中に回心をした30台半ばで同じバスクの貴族ロヨラIgnatius de Loyola (1491頃-1556) がおり、彼との出会いによって、ザビエルは信仰の世界に入るのだった。

ロヨラは王国の敵、同家の敵だったために、当初、それを肯んじなかったのであるが、

そのころすでに母がみまかり、3年後に兄ミゲルが逝き、その翌年にはザビエルの未来を予言した姉マグダレナが死んだ。傷心に沈むザビエルに、一種の妖気をただよわせたロヨラの接近は続き、ついに心を動かしてしまう。まさに運命的な出会いだった。

古川薫『ザビエルの謎』 文春文庫 1997 41頁

と言う指摘の如く、人生において誰でもが味合う悲哀に若いザビエルが遭遇していた頃の出来事だったのである。

その間、家計の窮乏から退学の話も出たのだが、修道院長だったマグダレナの助言と聖バルバラ学院がポルトガル国王の補助を受けていたために、その給費生となる事が出来たと言う事、また、母方の叔父達の援助を受ける事で以て学業を続ける事が出来るようになったと言う事情があったのである。

そして、同じ頃、宗教改革の一方の旗頭となるカルヴァンJean Calvin (1509-64) もパリ大学にいたと言う。

教皇パウルスPaulus 3世 (1468-1549 在位1534-) による認可は1540年になるのだが、1534年にはロヨラはザビエル等7人の同志と共に、「モンマルトルの誓願」を以て「イエズス会」Societas Jesuを設立、布教活動を行うのだった。

そこに見られるものは、

清貧・貞潔・聖地巡礼の誓いを立て、教皇の命とあらば地の果てまでも福音を携えて使することを義務とし、宗教改革によって動揺弱体化したカトリックの内部に新しい息吹を与え、対抗宗教改革の中心的人物になったのである。

小嶋潤「西洋教会史」 刀水書房 1986 386頁

と言われるもので、「反宗教改革」の担い手としてロヨラを中心としてザビエルを始めとする人々によってヨーロッパは元よりアジア、そして、世界の各地にその活動の場を広げて行くのである。

1492年、それ迄イベリア半島を支配してきたイスラム教徒を駆逐して、キリスト教に基づく「レコンキスタ（国土回復運動）」が、1469年に結婚したカスティリアのイサベル Isabel 1 世（1451-1504 在位<カスティリア>1474-、）とアラゴンのフェルナンド Fernando 2 世（1452-1516 在位<シチリア>1468-、<アラゴン>1479-、<ナポリ>1506-11）によって完成。

新しいスペイン（エスパーニャ）王国が建設されたのである。そして、そこには、「一つの国家には一つの信仰を」と言う旗印が掲げられていたのである。

従って、従来キリスト教、ユダヤ教、イスラム教等が曲りなりにも共存していた在り方から、キリスト教一辺倒となり、信仰の純化が行われ、これに伴って他の宗教が排除されるのだった。

1478年に異端審問所の設置を教皇から得た事で異端審問（宗教裁判）が活発化される事によって、宮廷の高官にもなっていたユダヤ人等異教の人々の苦難・迫害が始まり、改宗する者、表面的に改宗する者等が続出し、これをコンベルソ（新キリスト教徒）と言い、マラーノ（豚の意、隠れユダヤ教徒）と言われながらも信仰を守る者もいたのである。

そのため、コロンブス（クリストバル<フォロ>・コロン） Christopher Columbus（1451?-1506）の「西航」の一行の中にもそうして国を追われた者がいたと言われているのである。

ポルトガルの異端審問所は、スペインのそれよりもずっと後の、1537年に設立された。（中略）ポルトガル王は、金銭を払えば亡命者たちに宗教の自由を認めていたのである。

ケドゥーリー編、関哲行・立石博高・宮前安子訳
『スペインのユダヤ人』 平凡社 1995 39頁

と言われるように、ポルトガルのそれはスペインよりは緩やかだったとしてポルトガルへ逃げる者もいたのだが、同国は1580年にはスペインに併合されてしまうのである。

そうした中で異端審問に辣腕をふるった、自らもユダヤ人と言われ最初の異端大審問官となったトルケマーダ Tomas de Torquemada（1420-98）は、教皇の支持を受け2,000人の異教徒を焚殺し、改宗者を国家の危険要素であるとして、「国土回復」と同じ年の1492年には16万人のユダヤ人の追放に関わったとも伝えられているのである。

コンベルソは、真のキリスト教徒なのか、それとも隠れユダヤ教徒なのか、旧キリスト教徒は、コンベルソに対して新たな、しかもより深刻な問題を提起することになる「最終的解決」を構想していた。異端審問所が設立されると直ちに異端審問官たちは、それらの新キリスト教徒の多くが唯一、真の信仰であるユダヤ教を秘密裏に保持しているとの疑いを、間違いなく強めることになる

同上書 76-7頁

と言う指摘に見られる、ユダヤ教徒取締りの強化を計る事になるのだが、これは日本におけるキリシタン弾圧と比べ如何がなものだろう。

異端審問そのものは10世紀頃から始まり、12世紀には、二元論と禁欲を掲げたカタリ派 Cathari, その分流で「アルビジョア十字軍」によって徹底的に弾圧された南仏アルビの人の意をもつアルビジョア派 Albigeoisを抑えるために整備されたと言われているのである。

そして、1484年、インノケンチウス8世(1432-92 在位1484-)によって、「魔女大勅書」が発せられ、同時期、ドメニコ会による悪魔学の書が著される事で更に明確化されたと言うのである。

そして、この異端審問の淵源として、都をコンスタンチノーブル(現在のイスタンブール)に移したローマ皇帝コンスタンチヌス Constantinus 1世(大帝 272-337 在位324-)による、325年の「ニカイア(ニケーア)の公(宗教)会議」が言えるのではないだろうか。

同皇帝が小アジアのニカイアで開教300年を期し、各地の司教を召集して行ったこの会議において、「子であるイエスは世界創造以前に父から自らの存在を直接に受けている点で他の被造物と異なっているが、なお神とは異質であり、他の被造物と同じく無より造られた」(ブリタニカ国際百科事典)と、イエスの人性を重視したアリウス派が、「三位一体」を称えるアタナシウス派によって異端として排除されたのである。

そして、この公(宗教)会議はキリスト教の純化のためにその後も何回も開催され、カトリックもこれを継承するのだった。

尤も、プロテスタントでも異端審問とも言うべきものは行われており、「自由」を求めた人々が渡航したアメリカで、マサチューセッツ植民地における「セーレムの魔女裁判」(1692)として知られるものを代表とする、「魔女狩り」、「魔女裁判」が18世紀に至る迄続けられたと言われているのである。

そして、

スペインの異端審問が最終的に廃止されたのは1884年で、1808年まで

に約3万2千の異端者が火刑となったと推定されているが、その大部分がコンベルソであったと思われる。

同上書 37頁

と言われているのである。

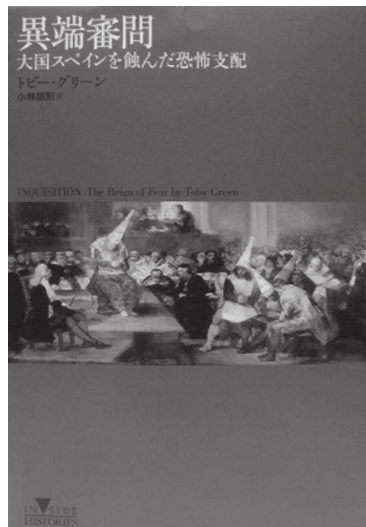


写真1 『異端審問』

こうした風潮の中で、ザビエルもインドにおける最初のユダヤ人の炎殺刑に関わったと伝えられているのである。

16世紀、植民都市ゴアにポルトガルから逃れてきたユダヤ人が住みつき、さまざまな分野で活発な活動をするようになったのだ。

徳永恂，小岸昭『インド・ユダヤ人の
光と闇』 新曜社 2005 58頁

と言われるように、ヨーロッパを追われてその「生きる」の場をインドに求めるようになったユダヤ人。

1498年のガマのかりカット到着から10年余り、ポルトガルは、1510年にゴアにアジアの拠点を設け、ザビエル自身がその状況を賛嘆した「黄金の都ゴア」へと発展する過程の中で、早くからその「生きる」の場を求めてインドへ逃れてきていたユダヤ人は、その「生きる」の場を狭める事を余儀なくされて行くのである。

従って、

インド洋制海権をほぼ手中に収めたポルトガルは、錦の御旗として掲げたキリスト教普遍主義を貫徹するために、東洋の離散地^{りさんち}においてさえも、このような最初のユダヤ人犠牲者を火炙りにする必要があった。

同上書 64頁

と言われるように異教徒、ユダヤ人への対応を明らかにするのだった。

1543年、インドにおけるユダヤ人に対する最初の焚殺刑が医学士ジェロニモ・ディアスに対して、「首を吊られ、その亡骸が焼かれて灰になるまで」(同上書 64頁)と言う形で執行されるのである。ガマの渡来の45年後の事である。

そうした中でザビエルは、

「午後になると、未決囚たちの告解を聞くために留置所^{りさんち}にいき総告解をする[準備のため]、その方法と順序を初歩から説明し理解させました」と言う。ゴアにおけるこうしたザビエルの活動はリスボン異端審問所での「聖務」に似ているが、この「未決囚」告解の聴聞の向こうに何があったのだろうか。

同上書 59頁

と言う役割を果たしていたと言うのである。

ここで著者が言外に含ませているものは、ザビエルの行っている「聖務」が、「未決囚」の「死」にも繋がるものであると受け取れるものであると言う事であり、それを彼が日課の如くに行っていたと言うのである。

そして、

「インドの使徒」フランシスコ・ザビエルもまた、聖なるカトリック信仰に背いたマラーノに対するむごたらしい刑の執行にいささかも疑いをもたないキリスト教絶対主義者の一人だったのだ。

同上書 64-5頁

と言われるのである。

時代の風潮の中でのこうした事はザビエルにとっても普通の事であり、むしろ、「信仰者」

としてユダヤ教徒の存在を許す事ができなかったのだろうか。そして、

イエズス会と言う稀有な世界組織を創設したイグナチオ・デ・ロヨラに、「行く先々を信仰の炎で包め」と言われ、その聖なる使命を持ってインドに渡ったザビエル（後略）

同上書 58頁

と言われるように、彼は「使命感」を持ったカトリックの宣教師だったのである。

ザビエルの提言から14年後の1560年、ゴアに異端審問所が設置される。

同上書 69頁

と言われるのである。

最後に、上記の諸引用文が載っている『インド・ユダヤ人の光と闇』に記されている、オールドゴア博物館長が言ったと言う言葉を引用しよう。

「今日、後年聖人として列聖される事になったザビエルが、如何に多くの人々の苦しみと残酷な死の原因となる非人間的な提言を行ったかは、想像に絶する。……ナチによる恐怖の蛮行をも凌ぐ異端審問所の犯罪行為についてはもっと調査研究が行われてしかるべきである」

同上書 75頁

と言うのである。

こうした流れに先立ってポルトガルでは、1143年カスティリア王国から独立してポルトガル王国を建設し、1249年、アフォンソ Afonso 3 世（1210-79 在位1248-）の時スペインに先んじて「国土回復運動」を完成し、以後、ポルトガルの王権は海商ブルジョアジーの協力を得て積極的に海外へ進出する事を計り、国の建設に資するのだった。そうした中で、

年代記者アズラはその著書（.4）において、「航海王子」と呼ばれたドン・エンリケがいかなる企図をもって南方に向けて遠征隊を遣わすにいたったかを述べている。（中略）まず第一に、王子がいかに強く南方の未知の世界に対する知識欲に駆られていたかを指摘している点である。

松田毅一、E・ヨリッセン『フロイスの日本覚書』日本

とヨーロッパの風習の違い 中公新書 1991 34-5頁

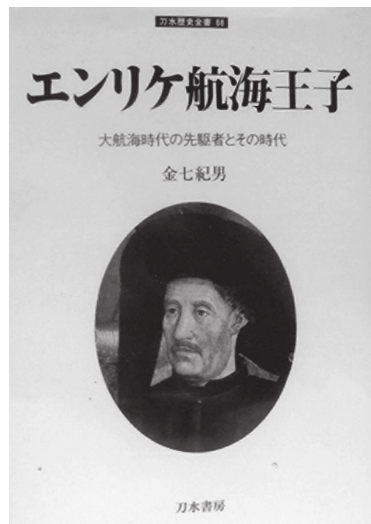


写真2 『エンリケ航海王子』

と言う指摘に見られるように、自らは航海をする事はなかったが、未知なるものに対して強い関心を持っていたエンリケ航海王子 Henrique o Navegador (1394-1460)。彼の主導による探検から始まって、「東航」する事で以てアジアに至ろうと言う企てをポルトガルは持つようになるのだった。

当代にあってはキリスト教の布教ということが海外遠征に際して大きい意味をもっており、それがまた、異教徒である人種に戦争をしかけることの正当性の論拠ともなっていただけに、知識欲ということが第一に掲げられているのは、当代においては大いに驚嘆に値することだった。

同上書 34頁

と言われるエンリケ王子の先見性とも言える考え方が、その後のポルトガルの在り方に大きく作用する事になったわけである。

そして、それはザビエルの「生きる」をも規定する事にもなるのである。

尤も、そこには、併せて、「国益に資する交易、イスラムと対峙する上でのその実力の確認、プレスター・ジョンの探索、そして、キリスト教布教のための宗教的情熱」と言った事もあげられているのである。(金七紀男『エンリケ航海王子』大航海時代の先駆者とその時代 刀水書房 2004 91頁)

そして、また、「彼は、一つにはポルトガルの国富をますため、二つには巨費を要する彼自身の航海術研究事業の資金を補うため、貿易によって利益をおさめようとしたのである。その貿易は奴隷売買を主としたものだった。(中略) まず最初、カナリー群島で奴隷狩りをしたが、つぎにアフリカ大陸に目を転じ、サハラ砂漠の海岸地方の土人を捕獲することにした。1448年、彼の派遣した船隊がギネヤより927人の土人と多量の金を輸入するや、国民ははじめて彼の事業の価値を認めたという」(板橋勉『南蛮船がきたころ 平戸長崎切支丹記』至誠堂新書48 昭和46年 78-79頁) という指摘もあるのである。

そして、未だ古いものの残滓が色濃く残ってはいたものの、時恰もルネサンスの時代に当たり、ヨーロッパではイタリアを始めとして清新の空気が醸成されてきており、「未知」なるものに対する関心が高まりつつあったと言う風潮とも波長があっていたと言えるのである。そして、海には危険はあるものの「自由」があったのである。

そうしたものの現われがセウタ(北アフリカ)であり、マデイラ諸島、ヴェルデ岬諸島(共にアフリカ西岸)への進出だったのである。

尤も、そこには、「国土回復」をなしスペイン王国建設に大きな役割を果す事になる東隣りのカスティリア王国の存在がポルトガルの東進を阻んでおり、勢い西に向かい海に出る事を余儀なくされていたと言う事情があったと言う事もあるのである。



写真3 ユーラシア大陸最西端
ロカ岬モニュメント



写真4 ロカ岬から見た大西洋

ポルトガルはイベリア半島内部ではカスティールに敗れたが、海外では勝利を収めた。即ちジョアン王子はアルカソヴァス条約でカス

ティーリャに対してギネア海岸, マデイラ, アゾーレス, ヴェルデ岬諸島におけるポルトガルの独占権を認めさせることに成功したのである。

生田滋『ヴァスコ・ダ・ガマ—東洋の扉を開く—』
(大航海者の世界<II>) 原書房 1992 20頁

そうした風潮の中, バッカスの子とも言われるルーススを祖とし, その血を引くポルトガル人自身を誇り高く謡った, 『ウズ・ルジアダス—ルーススの民のうた』(池上岑夫訳『ウズ・ルジアダス—ルーススのたみのうた』白水社 2000) で以て, カモンイス Luis Vas de Camões (1524-80) は「海の民」ポルトガル人の栄光を称えているのである。

こうした「海の民」ポルトガル人の活動が「海の帝国」を建設させるのだった。そして, 彼らの心根にあるものが「サウダーデ(郷愁)」の念であって, それを現わしたのが国民的歌謡「ファド」であると言われているのである。



写真5 リスボア(ン)港(中央・発見のモニュメント,
右・ベレンの塔)

<コロンブスの「西航」>

こうしたポルトガルの在り方に対抗すると言う事もあって, 「国土回復」の勢いを駆ってスペインでは, 「合理」かつ清新の風潮の現れでもある「地球球体説」に基づいた, 「西航」によりインディアス(アジア), チ(ジ)パング(日本)へ行く事で, その「富」を得ようとする「夢(希<野>望)」を受け入れて, 結果的に新大陸(アメリカ)発見の端緒となったサン・サルバドル San Salvador 島へ到達した(1492)コロンブスの航海の後押しをするのだった。

カスティーリャはアフリカ方面に進出することが不可能になり、その結果西に向かわなければならなくなった。これがコロンブスの新大陸到達へとつながっていくのである。

同上書 20頁

と言われるように、両国による東西にその航路を分けたアジア到達の競争がなされる事になる「大航海時代」が歴史の上に展開されるのである。

そうした中で、ポルトガルは「東航」する事で以てスペインに先んじてアジアへ到達するのだった。

エンリケ王子の探検により海外進出を活発化させたポルトガルは、1488年にはディアス Bartolomeu Dias de Novais (1450頃－1500) がアジアへの中間点である、アフリカ南端喜望峰 Cape of Good Hope へ到達。

そして、

アフリカ人捕虜は1498年、コロンブスの第3回目の航海によってアメリカに到着していた可能性がある。

エルティス, リチャードソン 増井志津代訳『環大西洋奴隷貿易歴史地図』 東洋書林 2012 197頁

と言われるその同じ年、1498年5月には10ヶ月の航海の後ガマ Vasco da Gama (1460頃－1524) による「インド (アジア) への道」が開かれたのである。



写真6 『ヴァスコ・ダ・ガマ』

その結果,

海洋の探検はその結果として二つの重要な成果をもたらした。即ち、一つは軍事と宗教上のものであり、もう一つは交易についてである。イスラム勢力を攻略し、ヨーロッパと香料諸島を直接結びつけることを確立した。

ペンローズ, 荒尾克己訳『大航時代』
筑摩書房 1985 73頁

と言う指摘の如く、ヨーロッパの人々はそれ迄インド人、ペルシア人、アラビア人、そして、ヴェニス商人等の手を経てもたらされていたアジアの物産、特に、胡椒を始めとする香辛料を直接手に入れる事を切望してきていたのだったが、それをポルトガル人が果たしたのである。

これによって香料の価格革命が起こったと言われているが、ポルトガルに莫大な「富」がもたらされるのである。先を越されたスペインはそれをどう感じたのだろうか。

このポルトガルのインド到達は、その後の「ポルトガル帝国」の建設を始めとする西欧列強による植民地獲得競争(活動)の端緒となるのだった。

スペインとしてはこれに対抗する事もあり「西航」を繰り返えし、「新大陸」での地歩を固めていくのであって、コロンブスも4回の航海をしたと伝えられているのである。

コロンブスの最初の「西航」の6年後、古くからアラビアとの貿易が行われていた事で、7世紀にはアラブ人による集落が作られており、

カリカット—現在のコジコーダーはインド南部にあるケララ地方の都でインド洋周辺では群を抜いて重要な港である。中国は唐(618-907)の時代からカリカットとの交易をおこなっていた。中国にとっては前進基地としてのみならず、貿易港としても重要で、(中略)中世の有名な旅行家や探検隊はほぼ全員、例えばマルコ・ポーロ(1254-1324)や、イブン・バトゥータ(1304-68)アブドゥル・ラザク(1349-87に活動)なども、カリカットまで旅をしている。永楽帝の治世の中国も、カリカットを古里と呼んで、インド洋における商業の一大中心として明確に認識し、「西の海で最も重要な港」「外国の商人たちが合流する港」と評していた。

メンジーズ 松本剛史訳『1421 中国が新大陸を

発見した年』 ソニーマガジズ 2004 101-2頁

と言われ、中国でも古くから注目されていたカリカットCalicut（カレクト，コディコーデ Cozhikode）へガマは到着するのだった。

こうしてスペインに先だって「インド（アジア）への道」開拓に成功し、ポルトガルはそこにアジアにおける地歩を得るのである。

そして、このカリカットがあるマラバル地方（共産党政権時代もあったケララ州を含む）には、

ユダヤ人や、ヤコブ派のキリスト教徒など、もともとは外国のからの移住者も住んでいた。このほかアラブ人、ペルシア人などのイスラム教徒商人それにグジャラートなどインド各地から来航した商人が多数住んでいた。

生田 前掲書 91頁

と言われるように、古くから外国人との交渉があったために、既にユダヤ人も住んでおり、こうしたユダヤ人にザビエルは関わる事になったわけである。その点で、在住ユダヤ人にとって、ガマの来航は「不幸」の始まりを意味する事になったわけである。

ガマの到達を契機にポルトガル人のインド、アジアへの来航が増え、それに伴って、船団に所属する司祭達による布教活動がなされるようになり、キリスト教（カトリック）の教えが広がっていくのであるが、それとは裏腹にユダヤ人の不幸、苦難が始まる事となるのだった。

そして、今日、インドでガマを仇として狙う若者を主人公にした映画が作られていると言われている事からして、ガマは「インドへの道」の「発見者」であると共に最初の「侵略者」とも言える事で以て、必ずしも歓迎されてはいない事が分かるのである。

それは、コロンブス、マゼラン Fernao de Magalhaes（1480-1521）とても同様に、マゼランはそれが故にフィリピンで殺されているのである。

こうしたコロンブス、ガマに見る「西航」、「東航」によるスペイン、ポルトガルのアジア到達競争において、コロンブスをして「西航」する事を促したトスカネリ Paolo dal Rozzo Toscanelli（1397-1482）等による「地球球体説」Kugelgestalttheorie der Erde、これには新大陸の存在はなかったのだが、それは、「合理」に基づく当時としての最新の情報・知識であって、それをコロンブスが知り得て、これを自分のものとする事が出来たと言うこの当時の社会の在り方を見逃せないのである。ルネサンスの時代だった。

「ルネサンスの3大発明」とも言われ、ポルトガル人も恩恵に浴し、コロンブスが当時最新の科学知識・情報を知り得たグーテンベルクによって発明された「活版印刷」による書物の普及、11世紀末には既に中国船に装備されており、ジェノヴァ人、ポルトガル人等が活用していたと言う航海の安全に資するための「羅針盤」、そして、身を守るための「鉄砲・火薬」等が航海を促すのだった。

そう言う点でその「西航」は、「合理精神（主義）」を象徴するものだったと言えるのである。だが、そう言いながらも、一面では、

13世紀の半ばに書かれたバルトロマイス・アングリカスの「事の性質について」によると東方世界には口のない人間、犬頭人、生涯たった一度しか子どもを産まない女性群、若いときには白髪だが、年齢を重ねるに連れ黒髪となる人種が存在するという。アングリカス「事物の性質」は、コロンブスの西インド航海に参照した本の一冊であることに注目すべきである。

高橋裕史『イエズス会の世界戦略』講談社 2006 23-4頁

と言う指摘があるように、未だこうしたものが当たり前のご如くに通用する時代でもあったのである。

そして、コロンブスが最もと言ってもよい、「信じた」もの、また、その「西航」の「判断」を決定づけたものとして指摘され、彼が熱心に読んだとされているポーロ Marco Polo (1254-1324) の『世界の記述』（東方見聞録）が常にあげられるのである。

彼がそこで得た情報・知識によって到達する事を夢見、渴望したチ（ジ）パングである日本。そこに記されている我が国については、

この君主は、すべて純金で覆われた非常に大きな宮殿を持っている。われわれが家や教会の屋根を鉛板でふくように、この国では宮殿の屋根を全部純金でふいている。(中略) 沢山ある部屋は、これまた床を指二本の厚みのある純金で敷きつめられている。

青木一夫訳「マルコ・ポーロ東方見聞録」

校倉書房 1993 217頁

と言うように、ポーロがどのように情報を得たかは分からないが、我が国は黄金に満ちた国と紹介されているのである。

それが故に、コロンブスがそれを求めて航海に出たと言う事になっているのだが、当時、彼が得られた知識とはこの程度のものだったと言わざるを得ない一面があったのであるが、それが故に、彼に「雄飛」をさせる事にもなったわけである。

一方では、「地球球体説」のような「合理」に基づいた最新の知識・情報を得ていながら、その反面、現（事）実とは懸け離れたものをも受けとめる事になり、それを修正し得なかったと言う点では、合理を求めた時代ながら、未だ、非（不）合理の残滓は否めないのである。これこそが時代だったと言う事だろう。

だが、その非合理を信じたがためにコロンブスは行動に出たのである。

その彼は自らの「夢（希く野望）」についての「実現」のために、自らの「意志」で以て「判（決）断」をし、それを「実行」に移したのである。

この「実行」には「危険」が伴う事は分かっていたであろうが、「合理」を尽くすと言う事で以て、その事が持つであろう「危険」を大きく回避する事が出来るのであって、彼はそれを彼なりに行った上で実行したと言えるのである。そうした彼が合理を尽して得た結論について、その庶子のエルナンドが次のように述べているのである。

まず提督は、世界中のすべての水と陸地が球体となっているために、東方から西方へぐるりと進んでいくと、地球を一周できる、と信じたことである。次に、この地球の大部分がすでに航海し尽くされている、ということであり、残されているのは、当時発見されていた最西端であるベルデ岬諸島とアゾレス諸島の西方だけであることを知っていた。そしてそこにはインドの東端が処女地として広がっている、と推定した。（中略）ベルデ岬諸島およびアゾレス諸島と印度東端との間にあるはずのこの余地は、地球の3分の1に過ぎない、と提督が信じたことである。

エルナンド・コロソ 吉井善作訳『コロンブス提督伝』朝日新聞社 1992 34頁

と言う地球の広さ、世界観を持っていたと言う事が分かるのだが、太平洋はないのである。

そして、その「実行」のためにある意味で最も難しいと言えるのが、スペインの両王の理解を得る事で、そこには、「資金援助」と言う、事を行う者にとって最も重要と言える資金の確保と言う問題があったのである。だが、それに対しても自らの「行動の正しさ」を「信じる」事で以て努力を惜しまなかったのである。

その点で、彼は、「自分の頭で考え」、「その考え」に従って、自分の「意志」を以て「判断し」、それに基づいて「行動した」と言えるのであり、かつ、自ら「信じた」事の目的貫

遂のために、「労」を厭わず、「意志」を曲げなかった「信念の人」と言えるのである。

この事から、彼は、正に、「合理の人」であり、「近代の人」だったと言えるのである。

「近代化」について自ら率先して範を示し、体現した人物と言う事で、「近代的指導者(リーダー)」と言う事が出来るだろう。

だが、その反面、「新大陸発見」後の彼の行(活)動は「近代的『指導者』」と言うものからは程遠く、「我欲」が前面に出たと言わざるを得ないのである。

今日、コロンブスが熱心に読み研究し、余白に多くの書き込みをしたと言うポーロの『世界の記述』が伝えられており、彼が得た情報が現実から遠く離れていると言えるものではあったが、それを「信じ」て「西航」したがために「新大陸」が「発見」されたのである。

そして、その後のマゼランの一行による航海で地球球体説が証明される等、新しい時代の幕あけをもたらす事になったわけであり、その点で、その「西航」は特筆されるのである。



写真7 クリストファー・コロンブス

尤も、それにより新大陸を始め、彼とその後継者によって「発見」された世界の人々の悲劇が始まるのだった。それは「東航」によってポルトガル人によって「発見」された土地の人々についても言える事だったのである。

こうして、コロンブス自身もチ(ジ)パング、アジアではなかったが、「新大陸」に到達し、「発見」した土地の総督(副王)の地位、手に入れた「富」の10分の1を自らのものにすると言う、支援者であるイサベル1世、フェルナンド2世両王との取り決めに従った「物欲」、「名誉欲」の充足(夢)を達成出来るかと思われたのである。

それは彼を応援したスペインの両王とて同じで、それが期待通りでなかったと言う事で、

イサベル女王亡き後のフェルナンド王のコロンブスへの対応が変るのである。

こうして、「富」と「地位」を得ると言う事で生命・生涯を賭けた「夢」を、結局、「夢」として終らせる事となってしまったと言えるのである。しかしながら、コロンブスは自身が「発見」した「新大陸」で副王・総督としての力量を発揮していれば話は別になっていたかもしれない。だが、そこ迄だったのである。

尤も、今日、彼が持ち帰ったと言われる「金」で装飾されたものが残されてはいるのである。

そして、彼の航海から半世紀、原住民に対して法的には自由だが事実上の奴隷制の「ミタ制」導入によって、ポトシ銀山（ボリビア南西端）の繁栄を見るのである。

「ミタ制」に象徴されるように、「合理」を尽したコロンブスが「夢」みた「富」の獲得のために、彼および彼に続く人々は「非合理」な「搾取」を行い、それによる労働力の激減を補うためにアフリカの人々を「新大陸」に連れて来るのである。

「合理」によって「発見」された「新世界」での非（不）合理であり、そこにあるのは支配と被支配の観念である。

そうした彼らについて、布教を通してその現実を知ったスペイン人司祭ラス・カサス Las Kasas (1474-1566) は、

提督（コロンブス 筆者注）とその部下たち、ならびにその後このインディアスの諸国と諸地方に入って来て巡り歩いた人たちのすべてが、自己の目的を達成するための、根本的かつ必要な手段と考えて、常にどのように努力したかといえ、それはインディオたちの胸の中に、自分らに対する畏怖心を植えつけて浸透させることであって、そのあまりの甚だしさに、キリスト教徒のことを耳にただけで、インディオたちのからだは、ぶるぶる震え出すほどであった。

ラス・カサス 長南実訳『裁かれるコロンブス』 岩波書店 1992 168-9頁

と指摘するのである。

こうした厳しい現実を打開するためにと彼は、「自由インディオの町」を建設したり、彼らの保護のための「法」の確立に奔走、ドミニコ会に入会した後メキシコで司教にもなるのだが、カサスのインディオに対する活動は植民者の反対で挫折してしまうのである。その背景にあるものは植民者による「物欲」と言えるのである。

そして、コルテス Hernan Cortes (1485-1547) によってアステカが、1519年に征服され、ピサロ Francisco Pizarro (1475頃-1541) によって、インカが1532年には滅ぼされるのである。

そして、原住民への苛酷な対応が高じたために労働力が不足すると言う事になってしまい、その補充のためにアフリカの人々を強制的に連れて来た事になるのだが、それはホーキンス Sir John Hawkins (1532-95) やドレーク Sir Francis Drake (1543頃-96) の活動へと繋がるものだった。

そして、その事は、また、ポルトガルも例外ではなかったのである。

海岸地帯を追われたツピナンパは内陸に移動したが、そのある集団は約1万人が殺され、あと2万人ほどは捕虜にされて、ポルトガル人の各家に奴隷として配分された。かくて16世紀末までには、リオデジャネイロとその周辺のツピナンパは事実上ほろぼされた。

本多勝一『マゼランが来た』朝日新聞社 1989 44頁

と言う指摘がなされるのである。

そして、こうした事はブラジル各地で起こっていると同書では言っているのである。

一面では、奇想天外とも言える情報を「信じた」が故に実行した行動(功績)が彼の名を歴史に留めさせ、大(西)洋の果てに行くとな落の底に落ちるとする世界観があった中、地球球体説に基づく自らの研究・考察を「信じ」て「西航」を断行、新時代を開くと言う功績を残したのである。そして、「コロンブスの卵」の逸話を生む事にもなったのである。尤も、彼自身それを望んでいたかどうかは疑問ではある。

そして、一方、ガマのそれは、東へ行けばそこにインドがあると言う事が既に知られていた航海だったのである。

II

<ザビエルの「東航」>

コロンブスの「西航」、ガマの「東航」から半世紀、イエズス会士ザビエルによる布教のための「東航」が行われるのだったが、それは、エンリケ航海王子以来の先人により切り拓かれたたものによって導かれての旅であり、ポルトガル国王の要請によるものだったのである。

新興のイエズス会は、ポルトガル王を後ろ楯とすることで躍進のチャンスをつかむことになった。

宮崎正勝「ザビエルの海 ポルトガル『海の帝国』と日本」原書房 2007 78頁

と言われる「東航」だったのである。

コロンブスの「西航」もキリスト教を広めると言う側面を持ってはいたのだが、布教と言う事よりは、自らの「利」に根ざしたアジアの「富」, 「発見」した土地の総督・副王等, 彼が拘った地上での問題（物欲）を追い求めての旅だったと言えるのであって、そのため、それが充足されなかったと言う事で以てその悲劇があったと言えるのである。

これに対し、ザビエルは布教を前面にした地上での「欲」を超えた「神の国」の実現を求めた点、そこに2人の違いがあったと言えるのである。

だが、ザビエルにも「物欲」ではないが「欲」があったとも言えるのであって、彼も満足して死んでいったかどうかは分からない。

カトリックの堅持から宗教裁判（異端審問）所を設立（1536）、イエズス会設置の許可(40)等カトリック強化策を取り、ポルトガルの海外進出に寄与した国王で、

「海の帝国」の建て直しと宗教改革への対応という二つ課題の解決を迫られる中で、両者をくみあわせる対応を考えていた。マヌエル1世が老獪な国王として現実的な政策をとり続け、「建前」と「社会の実体」をうまく組み合わせながらバランスをとっていたのに対し、19歳で即位したジョアン3世はあくまでも「建前」を現実に移し変えようとする。

同上書 56頁

と指摘され、「敬虔王」とも言われる38歳のジョアン3世 Joaõ o Pedoso（1502-57 在位1521-）。

彼によるロヨラへの、植民地インドでの布教の要請に従ったイエズス会の活動としてアジアに赴いたザビエル。尤も、彼はボバディラ神父の代わりの渡航ではあった。

1494年のトルデシリャス条約でヴェルデ諸島岬の西370レグア（約2070キロ）に境界線が移された。二つのカトリック国が、「世界の海」の分割についての協定を結んだのである。その際に仲を取り持った教皇は、両国王が、支配地域で宣教師の生活費、教会建設費などを負担する見返りとして、教区を設け司教を推薦するなどの教義面を除く布教上の権限を両国王に与えたのである。ジョアン3世は、そうした権限に基づいて、ザビエルのインド派遣に踏み切ったのである。

同上書 71頁

と言われるように、スペインとの競争の中でのジョアン3世の立場が大きく働いていたザビエルの渡航だったのである。

「布教上の権限」としてあるのだが、そこには、教会に関わる費用の支払いと言う側面が付随しており、これを理由にか、アジアに赴いた後ザビエルは度々ジョアン3世に対してその点の要求をするのである。

そして、イエズス会としても彼の渡航については、

イエズス会に先行する他のヨーロッパの著名な修道会の場合、クリュニー会は910年、ドミニコ会は1216年と、いずれも中世に創立されている。(中略)したがって1534年に創立のイエズス会は、ヨーロッパのキリスト教修道会の中でも「新しい修道会」であるといえよう。

高橋 前掲書 9頁

と言われる立場だったため、ジョアン3世からの要請は教団確立を急務とするイエズス会にとっても、渡りに船だったと言えるのである。

ザビエルはインド渡航に当たり国王・王妃とその子供達と会い、親密な対応をしてくれた事に感激し、以後、何かにつけてジョアン3世にその心情を吐露する事になるのである。

「イエスの軍隊」といわれる冒険的イエズス会の宣教師として新しい人生を踏み出したザビエルが東洋派遣の要請を受けたとき、33歳だった。剽悍にして企業心に富み、冒険家、探検家を輩出したバスクの血を引く彼には、ふさわしい任務だったといえる。

古川薫『ザビエルの謎』文芸春秋社 1997 48-9頁

と指摘される如く、司祭となって4年、分別がついてきたとは言え33(35とも言われる)歳と言う血気盛んとも言える活動的な時のこの要請は、彼にとっても願ってもない事だったと言えよう。

そこで彼は、「ザビエルのアジアへの旅立ちの日は、奇しくもかれの35歳の誕生日だった」(宮崎 前掲書 87頁)とも言われる1541年4月7日、「教皇代理」の資格を以てリスボア(Lisboa)を6隻の艦隊で出港するのだった。

乗船した「サンチャゴ号」は他の船と同じように500から600人が乗っている大船で、そこでは特別の部屋を与えられたのだが、彼は船員達と生活を共にする事を好んだのである。

船団の指揮者は国王からの言葉もあり、かたがたサビエルを特別扱いにした。身の回りを世話する専属のボーイまで準備したのであるが、サビエルは「教皇聖下の使節ではあるが、ボーイが無ければその権利を失ふこともありますまい」と言って、その一切を固辞して受けなかった。

アルーベ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・サビエル書翰抄』(上) 岩波文庫 2009 69頁 解説



挿絵1 フランシスコ・ザビエル
(長谷川静雄画伯 作)

と言う記述と、ザビエル自身が記している、

私達は艦隊の中で病気になった可哀想な病人の看護を引き受けた。彼等の告解を聴き、彼等に聖体を拝領せしめ、よき最期を遂げる様に、彼等を助けることが私の一日の仕事であった。

同上書 73頁

と言った生活を送っていたのである。

そして、東アフリカのモザンビーク Mzanbiqueからは「コウラオ (ターラン) 号」と言うガレー船に乗りかえて2ヶ月の航海の後、ガマ来航後40年余り、1542年5月5日、ゴア Goa に到着したのである。1年と1ヶ月の旅だった。

こうして、インド (アジア) の地に足を踏み入れたザビエルは、

私達はインドの主都ゴアに到着してから、4ヶ月以上に及んでいる。比の都、キリスト教信者ばかりの町で、実に見事である。ここには、多数の修道士を擁せる一つのフランシスコ会の修道院があるし、司教座聖堂もあって、それに又多数の参事会司祭が居る。イエズス・キリストの聖名が、不信者の真只中のこんな遠方の国にまで輝いているのを見るにつけ我等の主なる神に感動せざるにいられない。

同上書 92頁

と、そこでの第一印象を好感を以て記しているのである。

ガマによって開拓された「インドへの道」によって、その後、多くのポルトガル人が渡来する事となったインドでは、

ポルトガル人は、イスラーム商人が支配していた中心港カリカットに商館を築こうとしたが果たせず、カリカットの競争相手だった南部のコチンに要塞を築き、1503年以来コショウ貿易の拠点にした。コチンは、初期のポルトガルの「海の帝国」の実質的な首都だったのである。1510年にポルトガルはゴアの占領に成功し、1530年、つまりザビエルが来航する約10年前に総督ヌーノ・ダ・ガマの手で「海の帝国」の首都がゴアに移された。

宮崎 前掲書 109頁

と記されている如く、カリカットを望みながら、それを果す事が出来なかったために、「楽園」と言われ、ジャイプール Jaipur 藩王国時代にはカリカットと並ぶ貿易港だった中西部のゴアを、ポルトガルはアジアにおける拠点とするのだった。

ゴアにはアルブケルケを記念する聖カタリナ教会、聖フランシスコ会を始めとする13の教会が建てられており、100人以上の聖職者が任に就いていた。1533年には司教座が設けられて聖カタリナ教会が司教座教会になり、アジア諸地域におけるカトリック布教のセンターになった。ザビエルがゴアに到着するわずか9年前のことである。

同上書 109頁

と言われるように、そこはザビエルの来航前、既に、「カトリック布教のセンター」になっ

ており、「海の帝国の主都」として、

リスボンをモデルにして建設されたゴアは「アジアのベネツィア」と呼ばれ、「ゴアを見ればリスボンを見なくても良い」と言われる程の輝きを見せていた。

同上書 113頁

と言われる繁栄ぶりを示していたのである。

そして、ザビエル到着後40年、1583年から3年間、大司教フォンセカ Vicente da Fonseca (生没年不詳)の秘書として、ゴアに滞在したオランダ人リンスホーテン Jan Huygen Van Linschoten (1562-1611)はその著書『東方案内記』(1596)で、当時の様子を次のように記しているのである。

ゴア市は、全インディエ並びに東方諸国のメトロポリスすなはち首都で、ポルトガル人が来航して貿易をいとなみ、ポルトガル国王の副王、大司教が駐在し、国王の顧問会議と法務局が設置されており、ここから東方の各地を統治している。ここはまた、東方のあらゆる商品、物資の集散地であった。アラビア、アルメニア、ペルシア、カンパヤ、ベンガラー、ペゲーシアン(シヤム)、マラッカ、ジャヴァ、モルッカ、シナその他の地方からあらゆる商人が集って来て、あらゆる物品を購入したりするのである。

リンス・ホーテン 岩生成一・中村孝志訳・注、
渋沢元則訳『リンスホーテン 東方案内記』
岩波書店 1973 277頁

と、そして、また、

ゴアはエスタード・ダ・インディアの首都であって、副王・総督官邸、顧問会議、法務局、造幣、税関などの国家機関が存在していた。

岸野久「ザビエルの同伴者 アンジロー
戦国時代の国際人」吉川弘文館 2001 95頁

と言われ、「主(首)都」機能を備えた「海の帝国」ポルトガルのアジアでの中心地として、

その盛況ぶりは「黄金のゴア」(松田毅一『黄金のゴア盛衰記 欧亜の接点を訪ねて』 中央公論社 昭和49) そのものと言えるものだったわけである。

しかしながら、「使命」を以て布教に赴いたザビエル、そして、その彼を支援したポルトガル(人)ではあったが、そこには、コロンブスが読んでいたと言うアングリカスの著書のそれ程ではないにしても、下記の指摘に見られるような当時のヨーロッパの人々によるアジア、あるいは、現地の人々に対する人間観、世界観があったと言われるのである。



挿絵2 ゴア風景 (長谷川静雄画伯 作)

非ヨーロッパ人=奇怪な存在=まともな人間ではない=劣等人種という差別の方程式が確立されることとなった。そして大航海時代のヨーロッパ人は、非ヨーロッパ世界におけるこの方程式の「解」を、キリスト教による非キリスト教徒の改宗とヨーロッパ文明の移植に置いたのである。この解は現地住民が素直にキリスト教を中心とするヨーロッパの価値観を受容する場合きわめて平和裏に作用するものであった。しかしその「解」を現地住民が拒んだときには、武力による征服と奴隷、あるいは武力改宗のなかに、「もう一つの解」を見出すこととなったのである。その一方で、インド世界はヨーロッパと同等であり、ヨーロッパ文化の源郷として位置づけられてもいた。

高橋 前掲書23-4頁

そうした中でも、「インド世界はヨーロッパと同等であり、ヨーロッパ文化の源郷と位置づけられてもいた」と言うのである。こうした非ヨーロッパ世界についての認識・理解のさ

れ方の中で、ザビエルのそれは如何がだったのだろうか。

一方、ザビエルを嚆矢とし、その後も色々な形で西洋文明（化）に影響を受けて日本人が印象付けられたヨーロッパ人に対する理解の仕方は如何だっただろうか。

そして、「ポルトガル帝国」がもたらしたその植民地支配、そこには、それと表裏一体となった「神の愛」を説くキリスト教（カトリック）が大きく介在しているわけで、それを広める事を「使命」とする彼らにとって、そうした認識をされる非ヨーロッパ世界についてどう考えて彼らは布教に当たったのだろうか。

「キリスト（カトリック）教絶対」のザビエルについては、『聖フランシスコ・デ・サビエル「書簡」抄』に従って言うならば、一口で、「布教してあげてやっているのだ」、「貴方々のためにしてあげているのだ」という感じを受けるのである。

それは、今日、「自由」、「民主主義」を旗印にして海外へ出向いているアメリカ人の在り方に通じるものがあると言えないだろうか。

そこで言える「キーワード」は「使命」Mission である。従って、それは「ミッション」を持った者が持つ共通する姿勢なのかも知れない。そうでなければ「ミッション」の意味がないのだろうし、「ミッション」とはそう言うものなのだろう。

従って、それが思うように行かないと思ひ悩むだろうし、そのために、それを果しやすそうな別な所へ移って行く事も考えるかも知れないのである。

その点で、敬虔なキリスト教徒とされるザビエルにしても、

ザビエルが個人として謙遜で、控えめでありながら、異教徒に対して無意識のうちに優越感を持っていたことはどう見ても残念なことである。キリスト教徒として、また、ヨーロッパ人として、彼は自分が正しくアジア人と異教徒はまちがっていると確信していた。ユダヤ教やイスラム教は言うに及ばず、ヒンズー教徒も仏教徒も人間として犯しがたい価値があり、神の恵みの道を相携えて歩んでいることを認めようとせず、異教徒は偶像崇拜と迷信のわなにかかっている者で、つまり悪魔の仕業だとおもっていた。

ピーター・ミルワード 松本たま訳『ザビエルの見た日本』 講談社 1999 166頁

と言う指摘がなされるのである。

彼がこうした指摘を受ける側面を持っていたとしても不思議ではないわけで、「神」の「御心」を伝える事こそ自らにとっての絶対の「使命」であると信じて止まないと言えるザ

ビエルであるわけだが、それを信仰心の現われと取るか、信仰者の頑なさとするかと言う問題になってくるのである。

「神」に忠実で、信仰、布教に熱心であればある程その姿勢は強固なものになり、そこに得られる「神」と一体化した自らの「幸せ」、これを、これ迄持つ事の出来なかった者に伝える事こそが自らの「使命」であり、「神の意」に適う事であるとするのである。尤も、それを認めようとしなない者に対しては仮借ない態度を取る事にもなるのである。

こうした姿勢（信念）は他の全ての信仰・宗教の持ち主にも言える事であって、キリスト教の「神」に仕える者だけのものではないだろう。

そして、「神」の信仰を得た者の「幸せ」の対極にあるものとしてザビエルは、

霊操の指導をしてくれる人があれば、我等の主なる神に奉仕する望みのある善い人が、ここには中々多い。しかし、指導者がなければ、その実行は、如何に早く始めたとしても、よく反省するならば、始めるのが余りに遅かったと悟るであろう。この悟りは弛緩した精神を呼び覚まし、また平安を発見しないために、非常な力となる。ある人達は、全て理性に反して、自分の希望の方へ我らの主なる神を引き寄せようと努力している。彼等は、己の中に住んでいる善い望みよりも、邪な欲情に自分を委ね、我らの主なる神が、お召しになっている処へは、行きたくないのである。これ等の人々が、傾斜の急な坂道を、ひたすら、上に向かって登って往くさまは、羨むべきものではなく、実に気の毒である。それ程大きな苦悩の報いとしては、誠に辛い最後を見るからである。

アルーベ、井上 前掲訳書 42-3頁

と記しているのである。

ここではそうした表現を使っていないが、「神」と対立する「悪魔」、場合によると「天国」と「地獄」と言った二元的なものを感じさせる物の言い方をしているのである。固より、二元を言いながらも一元に集約される事は言う迄もないのである。

「神」を「信じ」ない者は「誠に辛い最後」を迎えるとするのは他の宗教も同じであり、そうした者にとって、正に、地獄の苦しみを味合う火炙りに彼は手を貸すのだった。

そこで、そうならないためには、そのための指導者を得る事の重要さを説くのであるが、その指導者として自らを目していると言えるのである。

そして、そこには、

いずれにしても布教事業と植民地市場の維持拡大というポルトガル政府の打算は一体不離の関係にあった。宣教師たちはポルトガル艦船に同乗しての渡航であり、現地での旅費・生活費がすべてポルトガル政府から支出されたのだった。

古川 前掲書 78頁

と言う指摘に見られる現実があり、ザビエル自身も当然の如く、これに従っての渡航だったのである。

そのため、彼がアフリカ南東部のモザンビークからゴア迄乗船したガレー船「コウラオ(ターラン)号」は、

このガレー船は並製のものでも全長約50メートル、3人がかりオール50挺で最大時速7・5ノットで走る「浮かぶ砲台」といわれた戦艦である。植民地支配のためにはこうした武力配置することも必要だった。

同上書 60頁

と言われる立派なものだったのである。尤も、そこには総督として赴任して行くソウザが乗ってはいたのである。

そのソウザについてザビエルは、

国王は私達に対して、どこまでも篤い配慮をお示しになり、私達のことを、今年印度へ赴任する総督に依頼して下さった。そして私達は総督の船に乗るのである。総督の好意はまた非常なもので、私達の乗船に関しても、自から親しく意を用ひ、他の誰にも委されぬ位である。航海中の必需品も、一切自分で責任を取り、更に総督の食卓に私達を掛けさせることまで、父公並びに貴兄にご報告するのは、総督の援助があれば、私達は異教徒の王達の中に、以下に大なる成果を與げることが出来るかを、父公並びに貴兄に識って戴きたいからである。印度に於ては、総督たる権力は大変なものである。

アルーベ、井上 前掲訳書 62頁

と記しているのである。

その一方では、同じく船に乗っていた人々について、

乗船している者は、役人を除けば大部分程度の低い人々を以て占められていた。大なる実業家も居るが、大抵は小商人で、他の多数の労働者と同様に、一攫千金を狙って往く人々であり、中には犯罪の故に、母国に留つていられない者もいた。なほポルトガル人ばかりではなく、コロンボ人も居る。

同上書 70頁

と言っているのだが、そうした人々が、やがて、インドにおいてザビエルをしてその在り方を嘆かせる事になるのである。

<ザビエルがアジアで見た現実>

インド（アジア）への伝道に期待をかけていたザビエルだったのであるが、この記述にある人々のインドにおける様をみてザビエルは、第一印象から転じて次のような事を国王ジョアン3世に述べているのである。

陛下が、印度の役人に、書面を以て神への奉仕のことを仰せられるばかりではなく、この義務に欠くる所のある者を、実際に処罰遊ばされ、その実例を以て、陛下の訓令書に、迫力をお持たせ下さらんことを、懇願申し上げます。なぜなら陛下が我等の主たる神の尊前に、召し寄せられ給ひし時、怒れる神から、陛下が次の詰問をお聴きになるべき恐れがあるからでございます。即ち「何が故に、汝は、その権力を以て、汝の臣下たる者の中、印度に於て、我の敵となりし者を罰せざりしや。それに反して汝は、同じ臣列に居る者ながら、汝の収入の仕事を疎かにしたる者は、厳罰に付したるか。と、

同上書 173-4頁

と言うのだった。

国王に対しても、「神」を引き合いに出して半ば脅迫的な言葉を以て、その臣下であるインド駐在の役人達の信仰、職務に対しての姿勢について憤り、それを放置している国王の責任についてもふれているのである。

そこには、

数ヶ月生活する間によどんだ空気の中から、あまりにも世俗的なゴア

の実像が浮かびあがってきた。イエスの「全ての人に福音を」という精神を实践しようとしていたザビエルは、ひたすら欲望の充足に明け暮れるゴアの人々の生活に絶望した。婦人を帯同しての渡航が許されなかったポルトガル人は、性的欲望を満たすためにゴアで安価な奴隷を買い漁り、放縦な生活に耽溺していたのである。聖職者も決して例外ではなかった。

世俗的な生活もある程度は容認せざるを得ないだろうが、ゴアはその限界をはるかに越えているとザビエルは思った。国王ジョアン3世宛ての書簡でザビエルは、ゴアに居住するポルトガル人が貪欲に富を追い求め、通常4人から6人の女奴隷を囲って性的欲望を満たしていることを激しく非難している。

宮崎 前掲書 117頁

と言われる現実があったのである。これをどう考えるかである。

「神の福音」を伝えると共に「交易」による「利」を求めての海外進出にあつて、商人達がそれに専念する事は国益に適っている事であり、彼らが日本から追われる大きな理由になった奴隷についても当時のポルトガル人社会では当然のものとして認識されており、これも「利」を生むものだったわけで、イエズス会で言う「下僕」と違いはどの辺にあつたのだろうか。

ジョアネはアンジローの召使、アントニオは某人の奴隷であつたこと、つまり2人とも隷属下におかれた身分であつた。このことは宣教団における彼らの活動内容と蜜接に関係している。

岸野 前掲書 178頁

と言う指摘があるのである。彼らはザビエルの日本渡航に同行した者達である。

奴隷制は、古来、存在しており、奴隷の身分に落ちるのは戦争に敗れた者にとっての宿命でもあつた。ギリシア悲劇『ヘカベ』に見られる王妃の身から端女へとの流転。

近代にあつては、階級社会イギリス（イングランド）において、その功績によって「サー」の称号を得て支配階級の一翼を担うようになったホーキンス、その後継者ドレークと言つた大航海時代を顕現した「海の男」達の多くがこれに関わつていた奴隷貿易。

1501年はそれから連続的に続く奴隷貿易開始の年とされるが、アフリ

カ人捕虜は1498年コロンブスの第3回目の航海によってアメリカに到着していた可能性がある。

エルティス, リチャードソン 前掲訳書 197頁

と言った指摘があるのである。

こうしてコロンブスによって最初にアメリカ大陸へ連れて来られたと見られているアフリカの人々は、その後、糖蜜を西インド諸島から輸入してラム酒に加工、これをアフリカ西海岸に運んで黒人奴隷を得、西インドないし南部植民地に送り込むと言った歴史上「三角貿易」として知られる形で以て、次々と新大陸へ連れて来られる事になるのである。

初期の環大西洋の奴隷は、1525年まで、アフリカから直接ではなくヨーロッパを經由して渡った。全体で1,070万人、あるいは1年に付き3万人の捕虜が3世紀半に渡りアフリカから到着したと概算される。

同上書 197頁

その後、「自由」を求める人々によって建国され、「独立宣言」にも「人間は神によって平等につくられている」と謳っているアメリカ合衆国にあっても、至極当たり前の慣習として奴隷制は存続するのである。

1619年にオランダ人によって連れて来られたのを皮切りにして、17世紀末からの1世紀の間にアフリカでの「奴隷狩り」によって連れて来られたと言う黒人奴隷が200万人に上ったと言われているのである。

奴隷は労働力として重要な役割を果たすのだったが、産業革命による北部での機械の発展によって社会問題として浮上、奴隷解放を巡って「南北戦争」を引き起こす事になるのである。

黒人奴隷は解放されたとは言え、白人と非白人との関係については今日に至っても社会問題となっているのである。

合衆国初代大統領ワシントンGeorge Washington (1732-99 在職1789-97) はヴァージニアのポトマック河畔にあるマウント・ヴァーノンの農場に沢山の黒人奴隷をもち、3代目のジェファーソンThomas Jefferson (1743-1826 在職1801-09) はそうした女性に子供を産ませていたと言う事で有名な人物である。

従って、そうした女奴隷との間に性的関係をもつ事をどう理解するかと言う事は個々人の価値観によるものであると言えるのであって、そうした性の問題については宮崎氏によると「聖職者も決して例外ではなかった」とも言うのである。

そして、人間の「生命」、「生きる」の根源にも関わる性の事については、普通、それは男

と女にとって至極当たり前の事であるのだが、21世紀の今日においても独身を旨とするカトリック教会にとっての大きな問題でもあるのである。

ザビエルの半世紀前に教皇として歴史上多くの話題を残したアレクサンデルAlexander 6世(1431-1503 在位1492-)は私生児を当然の如くに自らの政治に活用していたのである。尤も、そのために「宗教改革」が起こってもいるのである。

ザビエルにとってはこうした事は許せなかったわけである。

そして、また、商人達に対してザビエルは、

未信者達と絶えず商取引きをしているために信仰が薄く、贖い主であるキリストへの信仰よりも、しばしば物質的な利益のみを念願しているからでございます。

アルーベ、井上 前掲訳書

と言った、彼らに対する認識を示すと共に「商人」と言う在り方そのものについてさえも批判をしているのである。

それは「利」を求めて命がけで地の果てに迄も出掛けて行く商人にとっては、見当はずれな批判とも、また、厳しすぎるものであると言わざるを得ないだろう。これを彼の信仰の強さととるか、頑なさとするかと言う事である。

そして、そうした彼ら「商人」の活動があったからこそザビエルも色々な情報を得る事ができたのであり、また、日本への布教も可能になったわけなのである。

このようにアジアにおけるポルトガル(商)人の在り方を批判しながら、彼は、

インドでは植民地キリスト教会の腐敗と闘い、イスラム教社会では圧制を逃れる目的で受洗するカースト階級の漁師の中で活動し、文盲のキリスト教徒のため、子供達に歌を教え、その子供達の歌を通して聖書の「福音」を教えるのであった。

ペンローズ 前掲訳書 90頁

と言われ布教活動をするのである。そして、ザビエル自身も、

村に着くと、洗礼を受けていない子供に洗礼を授けたのである。村に到着すると、子供らは、私に聖務日課をとらへることも、食べることも、寝ることも許して呉れないで、いろいろな祈を教えて呉れとせがむ

のである。その時私は「天国は彼等のものだ」と悟りはじめた。

アルーベ, 井上 前掲訳書 106頁

と記しているように、当初の期待とは裏腹な布教の現実の在り方に伴って、自らの気持ちを示すのだった。

「『天国は彼等のものだ』と悟りはじめた」とは言っているが、子供相手のこうしたインドでの布教活動に彼は満足していたと言えるのだろうか。何故このように布教活動が思うように進まなかったのだろうか。

そして、こうした状況で以て南インドのヒンズゥー (バラモン) 教の聖地コモリン Comorin 岬と、ポルトガル人によって開港されて間もないトゥティコリン Tuticorin 周辺の海岸を中心とした布教を続けるのだった。

従って、インド布教にいささか失望感を持っていたともとれる状況からザビエルは、セイロン Ceylon (スリランカ Sri Lanka) へ布教の足を伸ばした後、1545年、モルッカ諸島での布教の見通しがたったとして、マドラス Madras (チェンナイ Chennai), サン・トメ San Tome を経由して、5月、マラッカ Malacca (ムラカ Melaka) へ向けて出発するのである。

そこは、香料を求めたポルトガル人が、アンボイナ Amboina (アンボン Ambon 1512), テルナテ Ternate (22), モロタイ Morotai 等の香料諸島と言うモルッカ諸島 Molcca (マルク Malku) 諸島への中継貿易港、東方経略の拠点として1511年に第2代インド総督アルブケルケ Affonso D. Albuquerque (1453-1513) がこれを占領、この地域の拠点としていた所だったのである。

マラッカはアデン Aden (13), オルムズ Hormz (07), ゴア (10) と言う点と点とを結んだポルトガルの「海の帝国」の東端に位置する重要拠点であり、東南アジアへの足場となっていたのである。そして、その後、更に、マカオ (11) がそこに加わる事になるのである。

9月末マラッカに到着したザビエルは、

東洋風と西洋風との混和された比の町を見て、大いに感心した。

同上書 215頁

と記している如く、その第一印象は良かったようである。

そして、

今日では第二流の町となってしまったマラッカは、ザビエル時代のマラッカとは、大分変わっているに違ひない。

同上書 215頁

と言っている如く、そこは15世紀の初頭マレー人によって建設されたマラッカ王国の港として発展していたのだが、

西紀1511年7月1日に、インド総督のアルブケルケがマラッカの前面に現はれ、これを攻撃した結果、1ヶ月の後に陥落した。ポルトガル人はこの勝利を回教に対する十字架の勝利だと考えたのである。

同上書 215頁

と言っているように、その後、1641年にオランダにとって代わられる迄東南アジアにおけるポルトガルの重要拠点として栄え、ザビエルにとっても香料諸島、日本、そして、最期の地となる中国への布教活動の足場となる重要な場所となるのだった。



写真8 マラッカ (海峡)

そして、彼にとっての新しい展開は、常に、「神の意志」によるものであるとするのである。従って、

マラッカは大なる港市であるから、ここへ来て後は、聖職者としての仕事に欠けるものはない。

同上書 220頁

と記しているようにマラッカに期待を寄せるのだった。

そして、それは、彼の布教活動に日本渡航と言う事は考えられていなかったのも、それが生まれたと言う事で以て、彼にとって重要な土地となるのである。

サビエルにとっても、この町は特別の意味を持っている。即ち、マラッカはサビエルの今後のプランのための基地となったもので、日本への大旅行や、シナへの渡航にあたって、ここから最後の飛躍を行った。

同上書 216頁

と言う所になるのである。

こうしてザビエルはマラッカを足場として香料諸島の布教に携わる事になり、1546年1月1日、ここを出帆、アンボイナ島(46・2)、モロタイ島(46・10)、彼がマルコと言っているテルナテ島(47・6)と足を伸ばすのである。

それ以前、彼はその書簡で盛んにマカッサル(ウジュンパンダン)をあげ、そこへ布教に行くとしていたのだが、マラッカへ着くとその行き先を上記の地へと変更するのだった。

だが、一ヶ所に長く止まる事はなかったのである。その点で、布教活動がこうした短期間で出来るのかどうかと言う事で疑問が生じさせられるのである。

しかし、こうした彼を始めとするイエズス会士による布教によるものなのか、今日でもこの地はイスラム国家インドネシア共和国にあってカトリック教徒の多い所であり、太平洋(大東亜)戦争中、ジャワ島を中心にして日本軍に協力的だったインドネシアの人々の中にあって、この地の人々は抵抗を示したと言われているのだが、それは彼らの信仰の故によるものなのか。

だが、こうした香料諸島での布教もザビエルにとって仲々厳しいものがあり、異教徒の頑迷さ、既に浸透しているイスラム教徒の抵抗、中でも、布教については国王の保護下にあるはずにも関わらず、ポルトガル人による軍隊を含む役人達の非協力により、その活動は成果を得る事が難しかったのである。

そうしたところで、1547年12月にマラッカでアンジローに会うのである。

<日本人アンジローとの出会い>

マラッカを中心とした活動の間でのアンジローとの出会いがその後のザビエルの「生きる」に大きな影響を与える事になるのである。

私がまだマラッカに居る時、ポルトガルの信頼すべき商人達が、私に重要な報知をもたらした。それは大きな島々のことで、東方に発見されて未だ日も浅く、名を日本諸島と呼ぶのだといふ。商人達の意見によると、この島国は、印度の如何なる国々よりも、遥かに熱心にキリスト教を受け入れる見込みがあるといふ。何故かと言へば、日本人は学ぶことの非常に好きな国民であって、これは印度の不信者に見ることのできないものだといふ。この商人達に、付き添はれて、アンヘロと呼ぶ一人の日本人が来ていた。

同上書 265頁

とその時の事について記しているのである。

ここでザビエルは「発見」と訳される言葉を使っており、それはポルトガル商人が日本を「発見」した事によって始まった事であるのだが、やはり、ザビエルにしてもそれは「地理上の発見」なのであって、それはザビエルを含むヨーロッパ人の感覚だったであろうと思えるのである。

それは、「発見された」側からみると、そこに優越性のようなものを感じさせられるのである。

そして、彼は商人達によって「発見」された日本には、そこに住む人々が彼がこれ迄布教して回った地域、それはインドであり、セイロンであり、香料諸島だったのであるが、それらより遥かに「学ぶ事が好きな国民」がいるために、そこでの布教に期待が持てると記しているのである。

そして、彼にそう思わせたのがアンジロー（アンヘロ 生没年不詳）こと弥次郎だったわけである。

そのアンジローは、自身の言葉に従って纏められたと言われるものによると、

私が日本の私の土地にいて異教徒であったとき、私はある理由により人を殺害してしまいました。私は逃れるために、土地に存在する、修道士の某僧院—当地の僧院のような避難所—に身を隠しました。(中略)ある船の船長ジョルジェ・アルヴァレスというポルトガル人と出会いました。私は例の紳士 {ドン・エルナンド} に手紙を渡したものと思っていました。ジョルジェ・アルヴァレスは私を伴い、大いに歓待し、すすんで私をパードレ・マエストラ・フランシスコに託そうと企てました。

岸野久『ザビエルの同伴者 アンジロー 戦国

時代の国際人』吉川弘文館 2001 26-7頁

と言っているのである。

35歳位でザビエルより3, 4歳若かったのだが、人を殺したために日本にいられず、上記のアルヴァレスの船で天文4 (1547) 年マラッカへ渡航したのだった。

そして、この航海の途中でアルヴァレスから彼の「大親友」であるザビエルについて、その人となり、また、キリスト教についての話を聞かされた事によってアンジローはこれに傾きザビエルに会える事を期待するようになっていくのである。

だが、アンジローがマラッカに到着した時には香料諸島への布教のためにザビエルは留守で、洗礼の意志を固めていたものの、妻帯者であり、父親とも言われている人を殺したと言う事で以てそれは認められなかったのである。

そのため、帰国を試みるのだったが、果す事が出来ず、マラッカに滞在を余儀なくされていたのだったが、やがて、香料諸島から戻ったザビエルとの出会いを得、お互いのその後の「生きる」を決する事になるのである。

そして今度は私に会うことが出来たのである。アンヘロの喜びは、実に大きかった。我等の信仰のことを聴きたいと言う熱望を持って私の所へ来た。彼はかなりポルトガル語を話すので、私達は、互ひに了解することが出来た。

アルーベ, 井上 前掲訳書 266頁



写真9 ザビエルとアンジローの像 (大分)

また、

若し全部の日本人が、彼と同じやうに学ぶことの好きな国民だとすれば、日本人は、新しく発見された諸国の中で、最も高級な国民であると私は考へる。

同上書 265頁

と、ここでも「発見」という言葉を使っているが、日本人について期待を寄せるのである。

このようにアンジローとの出会いで以て日本および日本人について高く評価し期待をするのであるが、それは、『書簡抄』に従って言えば、今までの布教活動の中でアンジローのような人間がいなかったと言える事からの、期待であると言えるのである。

そして、その彼の日本、日本人に対する期待には旧知のアルヴァレスのような日本へ渡航した事のある者から伝えられたものもあるのである。

だが、これ迄の布教活動の中でアンジローのように、言葉まで勉強し、かつ、自分に会う事を切望したと言う人物がいたとは思われないザビエルにとって、彼との出会いによりその心が大きく動かされ、それによってアンジローを生んだ日本に対する期待を膨らませたと言う事は信仰者と言えども、人間として当たり前と言えるのである。

ザビエル自身記しているゴア、マラッカについて得た最初の印象の良さも他の所と同様に時の経過の中でその色を褪せさせていった現実の中で、アンジロー、そして、日本に対する期待が大きくなったとしても不思議ではない。

尤も、この「最も高級な国民」が後に彼を悩ませる事にもなるのである。

結

『近代化日本—欧米との関わりで見る日本の近代化』を主題とし、本稿では上記のように「信仰者」としてのザビエルの誕生から、その「信仰」に基づいたアジア、特に、インド、東南アジアでの布教活動を取りあげた。

その活動の中でのアンジローとの出会いが彼らの「生きる」に転機を与えたのみならず、日本の歴史にもそれ迄になかった「西欧」と言うものをもたらし、大きく変化させる事になるのだった。

それに伴った紆余曲折の中で多くの問題（事件）が生じ、それによって多くの血が流されるのである。

その点で、ザビエルの来日は日本、日本人に何をもたらしたと言えるのだろうか。

次稿では、来日後のザビエルの「生きる」と、それとの関わりでの日本の在り方について

を考察したいと考えている。

拙稿を2月3日に逝去された長谷川静雄画伯の霊に捧げます。

参考文献

- (1) シュールハンマー 安田一郎訳『イエズス会宣教師が見た日本の神々』 青土社 2007
- (2) 泉秀樹「美しい日本人 フランシスコ・ザビエルの極東体験」『海の往還記』近世国際人列伝 中央公論社 1999
- (3) ロヨラ 門脇佳吉・注解『ある巡礼者の物語 イグナチオ・デ・ロヨラ自叙伝』 岩浪文庫 2000
- (4) ウッド 栗野真紀子訳『マルコポーロは本当に中国へ行ったのか』 草思社 1997
- (5) 林屋永吉訳『コロンブス航海記』 岩波文庫 1979
- (6) 鶴見良行『マラッカ物語』 時事通信社 1994
- (7) 増田義郎『大航海時代』 講談社 2001
- (8) ドッジ 白幡節子訳『スパイス ストーリー—欲望と挑戦と—』 八坂書房 1994
- (9) 泉靖一「大航海時代直前の世界」 会田・飯塚・井沢・泉・岩生監修『大航海時代』別巻 岩波書店 1973
- (10) 飯塚浩二「大航海の時代」 同上書

Research Notes

The Modernization of Japan: The Connections with Europe and America from the Viewpoint of World History

MATSUBARA, Masamichi

In this essay, I researched about Fransisco Zavier, because, in 1549 A. D, he brought Christianity to Japan in real earnestly with other Christians included Anjiro who reported the first Japanese Christian.

Zavier missioned Christianity to Asia under controlled by Potugese king João III . While he missioned in South East Asia, he met Anjiro at Malacca. Anjiro wanted to meet Zavier eagerly, because he wished to be christian baptisted by Zavier. Zavier was impressed by the strong will of Anjiro to be Christian.

So, after then, Zavier decided to come to Japan to mission Christianity.